

はじめに

2020年にはじまったコロナ禍は、2023年5月の第五類移行により、一つの区切りを迎えました。むろん、今なお、コロナはもとよりさまざまな感染症が蔓延するおそれと隣り合わせとはいえ、日常が戻った、という感をもつ方も少なくないことでしょう。その中で、この本を手にとった方の中には、なぜもう日常に戻った今に至って、改めてコロナについて考えるのか？と思う方もいらっしゃるかもしれません。

本書は、コロナ・インパクトが浮き彫りにした、未来の公民館像を考えていくうえでのポイントを、現場のみなさんにブックレット的な冊子としてわかりやすくお届けしようとするものです。コロナ渦中をこえた今、加えて当時の模索や考えたことの記憶がまだ新しい今こそ、これを考察・記録し共有する意味がある、と私たちは考えました。

いくつかの特徴をご紹介します。

まず形式上の工夫として試みたのは、職員が、市民や地域と関わる中で抱く問いを出発点とすることです。これはそれまでの研究活動をふまつつも、まったく別の思考回路を必要とします。そのため私たちは対面合宿も行き、問いのブレンディングを通して、本書の構成をともに一から考えていきました。問いからはじめる方式を通して、公民館初心者の方が立ち止まってしまう実践上の壁を、うまくこえていく力になればと願います。

同時に、一つひとつの項目にあてる文章は短いながらも、基礎的な公民館の歴史・理論・実践・政策などにふれていくことを意図しました。また文章自体は短くても、参考文献の提示を通して、さらに本書を通して関連する理論や実践にふれていただく、入り口となればとも考えました。

そして私たちはこの本が、初学者だけでなく、公民館などでの経験を有する職員や管理職など、若手・新任職員を育てる立場の方々に手に取って活用いただける、中級・上級編の実用書となることも意図しています。中堅職員や管理職は、各自治体や現場において、中長期的な計画的視座で公民館のあり方を考えていく立場の

方々です。それは本プロジェクトが、未来への公民館像の展望を意識して活動してきた成果を、お届けするにふさわしい方々と考えています。

総じて、コロナ禍が非日常をもたらした3年数か月は、公民館にとっても、それまでの日常を照らし出すものでした。そこで多くのことが悩まれ、考えられ、これまでの実践をふりかえりながら新しい試みも起こりました。痛みも含めたそうした記憶がなかったことのように忘れられることのないよう、本書がその間の思考と実践の記録となるとともに、上に述べたように現場で未来の公民館活動を考える、小さくも確かな礎の一つとなることを、私たちは願っています。

ここにいたる私たちの歩みをご紹介させてください。本書を執筆する私たちは、日本公民館学会で、2020年5月からの準備段階を経て、2020年9月にコロナ特別プロジェクトをたちあげ、2022年12月の研究大会までプロジェクトを運営してきたメンバーです。コロナ前まで、全国にちらばるメンバーによる学会研究活動と言えば年数回の対面学会の他はメールでのやりとりにとどまっていた。しかしコロナ禍以降広がったオンラインツールにより、日常的に研究活動を進めることが可能になりました。6回のシンポジウム開催の他、メンバーの丹間会員を中心とした政令市中核市を中心とした10市調査も行いましたが、何より新鮮に感じられたのは、日常的な研究・議論があり、その延長上にシンポジウムがあるというにふさわしいオンライン上での活発な議論・研究活動が、最後まで続いたことでした。

その成果は、『日本公民館学会年報第17号（特集1：コロナウイルス感染症と公民館—ポストコロナ社会を拓くために—）』（2020年）、『同第18号（特集2：ポストコロナ社会に向けた公民館像の模索）』（2021年）、『同第20号（特集：ポストコロナ社会に向けた公民館研究の展望）』（2023年）にまとめられ、トータル17本の論文は、どれもオンライン上で閲覧いただくことができます。

プロジェクトとしては最終まとめとなった年報第20号特集タイトル「ポストコロナ社会に向けた公民館研究の展望」には、一つの意図が込められています。本プロジェクトは活動の比較的早い段階から、感染対策やその他目の前の課題に対処療法的に向き合うための検討ではなく、コロナ・インパクトが公民館研究をいかに刷新するのか、俯瞰的に研究的視座を探求していきたいという思いを共有してきました。その

ため第 20 号では職員論・地域論・経営論という 3 つの視点において、2 年 4 か月の活動に基づく私たちなりの未来への研究的視座の提案を行いました。

同時に、学会での公的なプロジェクト活動が終了しようとするとき、私たちにはまた別の思いも芽生えていました。この間の研究成果を、公民館などの関連施設で働く職員・現場に届けられないかという思いです。本プロジェクトが研究者会員 4 名、実践者会員 2 名で構成され、両者の融合的な議論を大事にしてきたことも、影響していることでしょう。ここから本書発行にむけてさらに約 1 年半、私たちは活動を続けてきました。

最後に、本書は公民館学会の活動をふまえながらも、あくまでプロジェクト有志による刊行です。しかし規模が小さいながらも、研究者と実践者がともにフラットに活発に議論できる公民館学会のよさが、本書の基盤になっていることは間違いありません。その意味で、コロナ特別プロジェクトの議論にご参加いただいた皆様はもちろん、公民館学会 20 年の歩みなくして本書はありえません。本書の発行にあたり、関係各位他、学会を築いてきた尊敬すべき多くの先輩たちにも、ここに御礼申し上げたいと思います。

さあ、22 の問いを入り口として、古くて新しい、そして趣深い、公民館の世界を知り考える歩みに、私たちと共に出かけましょう。

2024 年 9 月

岡 幸江

本書の位置づけ — 関連書籍紹介を通じて —

公民館に関して、これまで多くの書籍が刊行されてきました。ここでは、代表的書籍を紹介しながら、本書の位置づけを明らかにしてみたいと思います。

下の図1に、ここ20年以内の公民館に関する主要書籍を整理してみました（副題は省略）。図の下側に公民館の基礎的な理解を促す入門的書籍を、上側に公民館の役割をより広く理解できる書籍を配置しました。図の左側には公民館の原点を見つめ直す書籍、右側に公民館の未来を描く書籍を置いています。

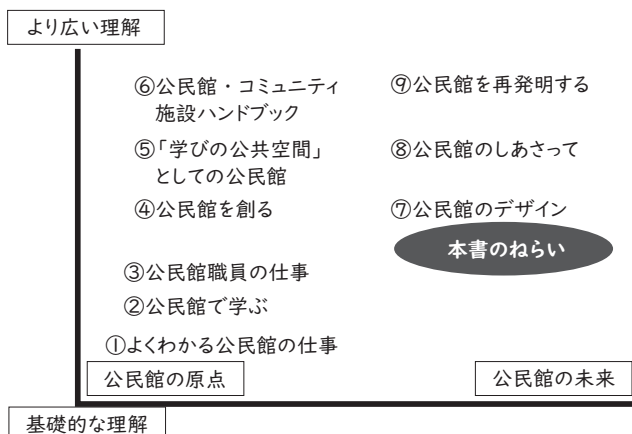


図1 公民館に関する代表的書籍と本書の位置づけ

各書籍の内容を簡単に紹介します。①全国公民館連合会編『よくわかる公民館の仕事（第3版）』（第一法規、2017年）は、1章「公民館入門」で公民館の仕事の基礎を理解でき、2章「困ったときの公民館Q&A」で仕事を進める際に直面するさまざまな疑問を解消できます。3章の論稿により公民館の役割への理解を深められ、公民館の仕事を学ぶ基礎になる1冊です。②長澤次編『公民館で学ぶ』（国土社）は、1998年から5年おきに計6冊が刊行され、各時期におけ

る千葉県内の優れた公民館実践を参照できます。最新のⅥ巻『コロナ禍を超えて未来を創る』（2023年）では、公民館がどのように災禍に向き合い、住民の学習機会を保障してきたかを学べます。③片野親義『公民館職員の仕事』（ひとなる書房、2015年）は、公民館現場に約40年関わってきた著者が、公民館の仕事の意味を徹底的に掘り下げたもので、どの層の職員にも豊かな含蓄があります。

④上田幸夫『公民館を創る』（国土社、2017年）は、公民館に込められた歴史と思想を丁寧に解説した書籍です。また、⑤佐藤一子『「学びの公共空間」としての公民館』（岩波書店、2018年）は、住民が共に学び文化を創造する「学びの公共空間」としての公民館の役割を明らかにしており、2冊とも公民館の価値と可能性を知るのに適しています。⑥日本公民館学会編『公民館・コミュニティ施設ハンドブック』（エイデル研究所、2006年）は、歴史・制度・運営・事業編などの観点から公民館の姿を総合的に検証しています。

公民館の未来を志向する書籍もあります。⑦日本公民館学会編『公民館のデザイン』（エイデル研究所、2010年）は、公民館の歴史を紐解きつつ、施設空間や事業のあり方を問い直したユニークな内容となっています。また、⑧公民館のしあさって出版委員会編『公民館のしあさって』（ボーダーインク、2021年）は、公民館の可能性を描こうとした書籍です。沖縄の那覇やエジプトの事例紹介から、公民館が豊かな潜在力をもった場であることに気付かされます。⑨牧野篤『公民館を再発明する』（東京大学出版会、2024年）も、未来志向の書籍です。本書は『公民館はどう語られてきたのか』『公民館をどう実践してゆくのか』の続編にあたり、3巻を通じて公民館の過去・現在・未来について学べます。

以上の書籍と比較すると、本書はコロナ禍を経た公民館の未来の姿を描こうとする点で図の右側に位置します。また、公民館の仕事をはじめたばかりの方だけでなく、日常の職務の中でさまざまな疑問を抱く中堅以上の職員の方にも役立つように構成しました。本書のタイトル『ポストコロナの公民館 ― 22の問いから考える ―』には、コロナ前に戻るのではなく、今後公民館がどの方向に進むべきかを一緒に考えたいというメッセージを込めています。ここに取り上げた文献や各部の参考文献を参照いただき、公民館の未来を共に考えるきっかけにいただければ幸いです。

【荻野亮吾】

ポストコロナの公民館
— 22 の問いから考える —

目 次

はじめに i

本書の位置づけ — 関連書籍紹介を通じて — iv

第 1 部 ポストコロナ時代の地域と公民館 /

第 1 部紹介 2

Q1-1 公民館の運営にあたって、対象となる地域をどうとらえればよいですか？ 4

Q1-2 学校、企業、市民活動団体との連携をどう築いていけばよいですか？ 6

Q1-3 公民館は地域づくりにどう関わればよいですか？ 8

Q1-4 地域行事の中止や地域団体の解散が課題です。
公民館はどう対応すればよいですか？ 12

Q1-5 サークルのメンバーの高齢化や固定化が課題です。
公民館としてどんな手を打つべきですか？ 14

Q1-6 公民館に来館しない住民もいます。
未利用者に対してどう働きかければよいですか？ 16

【第 1 部の参考文献】 18

第 2 部 ポストコロナ時代の公民館経営 / 9

第 2 部紹介 20

Q2-1 公民館における館長固有の役割とは何ですか？ 22

Q2-2 住民や利用者の声に向き合えばよいですか？ 24

Q2-3 公民館はお金を稼いでもよいのでしょうか？
実際に公民館で、どこまでふみこんでよいですか？ 26

Q2-4 公民館は、SNS とどう付き合えばよいですか？ 28

Q2-5 公民館を指定管理者として運営しています。
どんなことに気を付けて施設を運営すればよいですか？ 30

Q2-6 公民館は教育施設であると同時に公共施設でもあります。
公共施設を運用していく際に、行政基準に従いつつ利用者の声を
どう反映すればよいですか？ 34

Q2-7 公民館の評価をどのように行うべきですか？	36
【第2部の参考文献】	40
第3部 ポストコロナ時代の事業のゆくえ ……………	41
第3部紹介	42
Q3-1 参加者が楽しむことと学ぶことをどうつなげばよいですか？	44
Q3-2 公民館が生活・地域課題を扱うことと、自治体施策の推進啓発は、 何が違うのですか？	46
Q3-3 デザイン思考などの新たな手法を公民館活動にどう取り入れたらよいですか？	48
Q3-4 オンラインを用いた事業をする必要はありますか？	50
Q3-5 コロナ禍を経て、公民館・社会教育事業における人権教育を どう考えたらよいですか？	54
【第3部の参考文献】	56
第4部 ポストコロナ時代の職員像 ……………	57
第4部紹介	58
Q4-1 公民館の可能性や仕事の特徴は、どのように見いだすことができますか？	60
Q4-2 任用形態やキャリアの異なる職員が公民館職員として育つために、 どのような支援が重要ですか？	62
Q4-3 ファシリテーションが苦手です。自信をもって進めるためには、 どうしたらよいですか？	64
Q4-4 日常業務を通じて職員同士がつながるためには、どうすればよいですか？	66
【第4部の参考文献】	68
おわりに ……………	69